

リニア中央新幹線環境影響評価（生態系への影響）についての基本認識・現状認識と今後の検討の進め方（案）

1. 南アルプスにおける環境影響評価（生態系への影響）についての基本認識

- ①南アルプスの生態系は希少性と脆弱性が高い。しかし、近年、ニホンジカの分布拡大による食害等が高山帯の生物多様性を損ない希少植物の生育を脅かしている。
それに対し、防鹿柵の設置や高山帯裸地の植生回復工等の保全活動が行われている。
- ②リニア事業による環境影響評価においては、南アルプスの特性を理解した上で、事業の実施による環境への負荷ができる限り回避・低減・その他の配慮（代償措置等）がなされるよう適切に行われることが必要である。
- ③適切になされるよう、静岡市は事業者に促すとともに、自らも行政機関としての立場で努める。

2. JR 東海による環境影響評価についての現状認識

- ①2018年頃は、JR 東海による生態系に関する環境影響評価は不十分であった。
- ②国が設置した有識者会議において、科学的根拠に基づく精緻な検討が行われた結果、2023年12月に提出された「リニア中央新幹線静岡工区に関する報告書（令和5年報告）～環境保全に関する検討～」では、事業による環境影響の予測は相当程度明らかになった。
- ③現在は、影響は確実に生じることを前提に、影響の回避・低減・代償措置をいかに行うかについての検討の詰めの段階にある。
- ④影響の回避・低減・代償措置を検討するにあたっては、シミュレーション等による影響予測には不確実性があること、また、現地の局所的地形や環境の現況把握には限界があることから、将来発生する現象の予測には不確実性があることを認識する必要がある。
- ⑤その上で、不確実性に対処するため、順応的管理（不確実性の高いものに対し、観測・評価と計画・行動へのフィードバックを繰り返し、状況に合わせて適宜適切な対応策（行動）を実施し続けることにより、リスク管理を行うもの）によって、あらかじめ策定した保全措置を、観測結果（モニタリング結果）を基に柔軟かつ適切に見直し続けることが必要である。

3. 今後の検討の進め方（案）

（1）基本認識

- ①事業の実施により、どの場所の水分量がどの程度減るかについての予測は、シミュレーション結果等により、相当程度明らかになった。しかし、シミュレーション結果には、不確実性がある。また、水分量変化は、局所的な地形の影響等により、予期せぬ場所と形で発生する可能性がある。よって、あまりに精緻な予測を求めても不確実性は必ず残る。予測結果に不

確実性があることを前提に、適切な順応的管理方法を考えるべきである。

- ②水分量変化の回避・低減方法は薬液注入が主である。低減効果が期待できるが、高被圧地下水帯へ薬液注入しても十分な効果が出ないリスクがある。
- ③影響は植生への影響と水生生物への影響に大別できるが、この2つについては異なる対処方法が求められる。
- ④植生については、対象地域周辺に広範に生育している一方、自らは移動できないため、特定の場所では水分量の変化等により消滅の可能性がある。
- ⑤水生生物については、自ら移動できる一方、希少種は山域の沢、川の限られた場所に生息しているため、沢、川の生息環境が変化しても生息場の代償措置が取りにくい可能性がある。
- ⑥よって、植生については、周辺山域全体の植生分布を調べた上で、事業による影響を考慮したその総量管理による代償措置と希少な植物種への特別の管理（保全措置）が有効である。
- ⑦水生生物については、流量減少に伴う生息域の局所的変化への管理（保全措置）が必要である。トンネル湧水の河川への放流については水質・水温管理が必要である。

（2）今後の検討の進め方

以上を踏まえ、今後の検討を以下の通り進める。

- ①水分量の変化が生じる場所と程度を確認し、想定する。
- ②水分量変化の回避・低減策は薬液注入が主であるが、回避・低減努力を行っても何らかの影響が発生することが確実であることを前提として、保全措置を考える。
- ③発生する影響（植生への影響、水生生物への影響）の最大量を想定する。（最大量の想定は、薬液注入は水分量減少には効果が出ないとする。）
- ④「順応的管理」の基本的な考え方を整理する。
影響の最大量を前提として、それにも対処できるよう、観測・予測・保全措置計画→事業の実施→観測・評価・保全措置計画の変更のサイクルの回し方を決定する。
- ⑤植生への影響の具体的順応的管理方法と代償措置を決定する。
- ⑥水生生物への影響の具体的順応的管理方法と代償措置を決定する。
- ⑦事前の観測方法を決定する。
 - ・植生については、植生の全体量を把握するため、ドローン等を用いた広範囲な調査を実施し、「植物群落」を把握する。
 - ・水生生物については、生息場所の把握と生息場の評価によって、沢全体の生息環境を推定する。
 - ・トンネル湧水の水質・水温管理方法を決定する。

以上について、JR 東海と意見交換を進める。